



1	はじめに	1
2	応用生態工学会第26回京都大会の開催案内	2
3	2023年度海外学会等への派遣者募集	4
4	行事開催報告	
4.1	2022年度若手のつどい勉強会 in 福岡	6
4.2	第12回全国フィールドシンポジウム in 天野川	8
4.3	応用生態工学会金沢「トキを育む里山づくり」	11
4.4	応用生態工学会福井 福井県におけるコクチバスの 分布状況と駆除事業の現状	15
4.5	応用生態工学会福岡 第9回遠賀川中島自然再生勉強会	18
5	理事会・幹事会報告	20
6	2022年度行事経過と今後の予定	21
7	事務局より	23

1 はじめに

今年度5回目、第100号のニュースレターとなります。

今号では2023年度第26回京都大会の開催案内、海外学会等への派遣者募集、地域研究会における行事開催報告、理事会・幹事会報告など、学会の動きをお伝えします。

2 応用生態工学会 第 26 回京都大会 開催案内

応用生態工学会 2023 年度の第 26 回京都大会について、第 1 回実行委員会を 2022 年 12 月 26 日に開催し、開催準備がスタートしました。

■大会実行委員長：角哲也 京都大学教授

■開催日と日程案

【開催日】2023 年 9 月 20 日(水)～2023 年 9 月 23 日(土)

【日程案】

9 月 20 日：自由集会、ポスターコアタイム、各種委員会

9 月 21 日：口頭発表、自由集会、懇親会

9 月 22 日：総会、役員会、表彰、公開シンポジウム

9 月 23 日：エクスカーショ

スケジュールは、変更することがあります。詳細は、ニュースレターNo. 101 (5 月下旬予定)、及びホームページにてご案内いたします。

■公開シンポジウムのテーマ (案)

(仮題) 森里海をつなぐ「砂の道」

■発表申し込み期間 (予定)

2023 年 5 月下旬～6 月下旬頃 (講演集の要旨も提出)

■会場

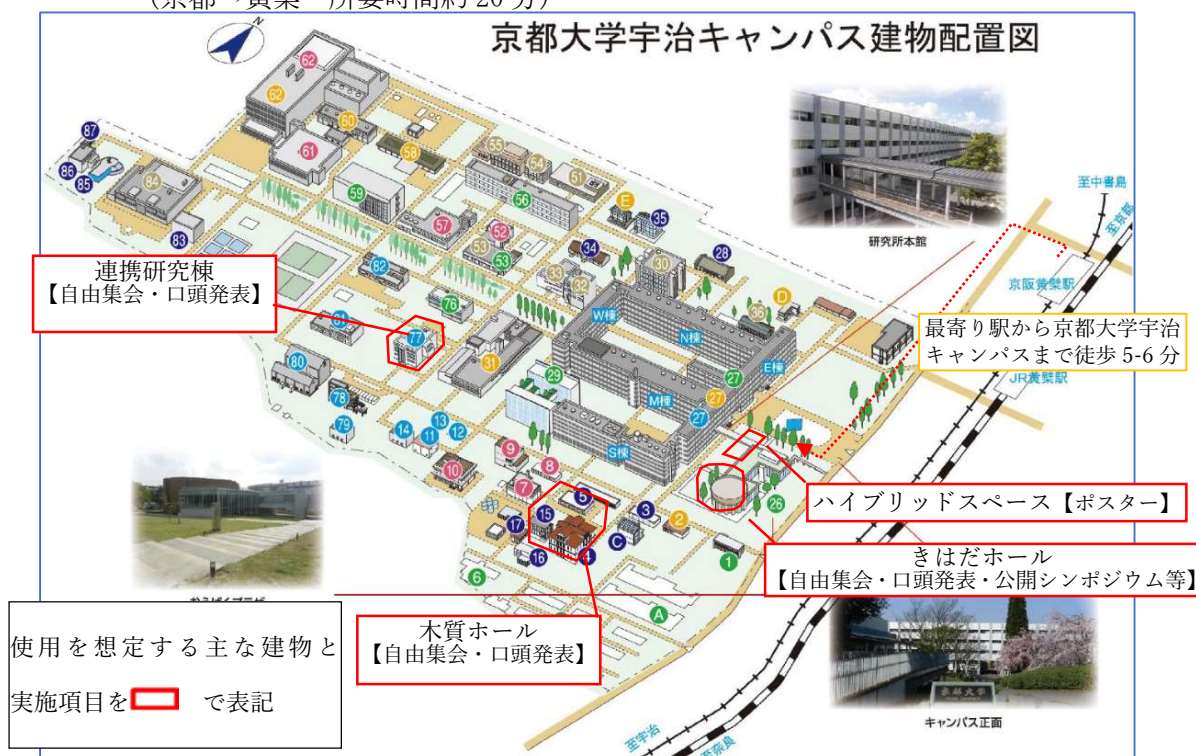
【開催場所】京都大学 宇治キャンパス

【所在地】京都府宇治市五ヶ庄

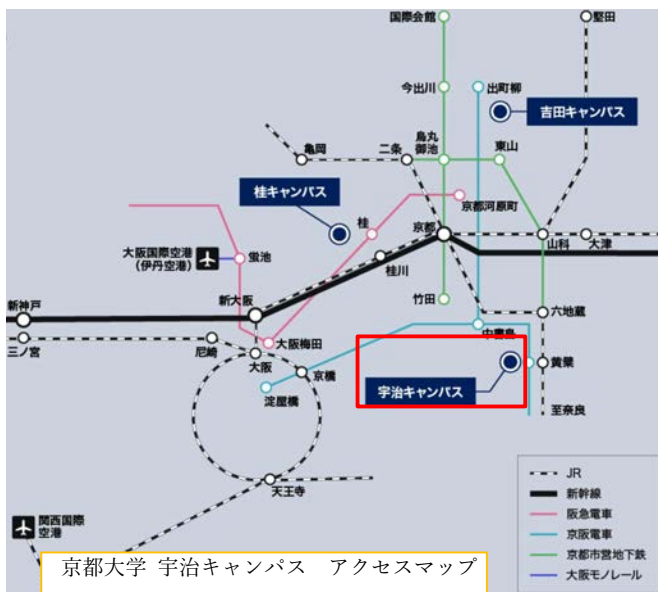
【最寄り駅】京阪宇治線「黄檗」下車→徒歩 6 分

JR 奈良線「黄檗」下車→徒歩 5 分

(京都→黄檗 所要時間約 20 分)



【交通】下図のとおり



【周辺のホテル状況】



3 2023 年度 海外学会等への派遣者を募集します

国際交流委員長 八重樫 咲子

2023 年度の海外学会等への派遣者を募集します。以下の募集要領をご覧ください。本制度を活用した研究者や技術者から有意義な経験や体験が報告されていますので、ぜひご応募を検討ください。

2023 年度海外学会等への派遣者の募集

国際交流委員会

応用生態工学会国際交流委員会では、2023 年度の海外学会等への派遣者 1 名を募集します。募集要領の概略は以下のとおりです。詳細は、学会ホームページをご確認のうえ、事務局まで申し込みください。

海外学会等への派遣者募集要領

1. 目 的

自然環境と開発の問題については、我が国だけに限らず多くの国々で関心が持たれ、様々な研究と実践的な試みが行われてきている。応用生態工学を発展させるためには、こうした海外での活動に積極的に係わり参加することによって、情報を得ながら、人的交流を図ることが求められている。

応用生態工学会では、ここに会員から希望者を募り、「派遣研究員」を審査選考して、当該年度に海外で開催される応用生態工学に関連する学会・シンポジウム・国際会議等に派遣し、その内容を応用生態工学会会員に報告するものである。

現在、新型コロナウイルスの世界的な流行により、国際学会・シンポジウム・国際会議においては、オンライン開催(ウェビナー開催)が定着しつつあるため、2023 年度の派遣者募集に関しては、ウェビナー開催への参加費に関しても助成対象とすることとした。

2. 選 考

1)資 格

- ① 応用生態工学会の正・学生会員であること(募集開始時点で会員でなくても、会員となることを条件として応募可能とする)
- ② 学生あるいは 35 歳未満の研究者・技術者

2)派遣研究員の選考

- ① 学会としての総助成額を 20 万円とし選考する。
- ② 選考にあたっては国際交流委員会において書類審査を行い、候補者を選定した上で国際交流委員会にて決定し、幹事会および理事会に選考の経緯および結果を報告する。

3)選考基準

- ① 派遣対象となる会議のテーマと本人のバックグラウンド(研究・調査経験)の整合性
- ② 派遣対象となる会議で何を学ぼうとしているのか、その焦点を明確に述べているか否か
- ③ 国際会議に出席して内容を把握できる能力
- ④ 応用生態工学への関心の度合い

- ⑤ 応用生態工学会での活動・参加状況・受賞歴
- ⑥ 派遣に関連する研究業績や業務実績

4) 派遣後の要件・手続き等

- ① 派遣研究員は、海外渡航の成果を指定の様式を用いて報告するものとする（報告内容は本学会のニュースレターおよび会誌“応用生態工学”に掲載します。なお、会誌“応用生態工学”では、「トピックス」に掲載します。）。
- ② 派遣終了後は、助成額の使途（使用費目と金額）について、決算報告するものとする。渡航先によっては、助成額の総額を上回る金額を使用した場合も考えられるが、その場合は、それらも含めて決算報告を行う。使用金額が助成額の上限を超えなかった場合には、余剰金を応用生態工学会に返金するものとする。
- ③ 何らかの理由により海外渡航と学会参加を中止する事態が生じた場合には、すみやかに応用生態工学会事務局にその理由などを報告するものとする。
- ④ 派遣研究員は、関連した研究や技術開発について、会誌“応用生態工学”もしくは英文誌“Landscape and Ecological Engineering”に論文を投稿することが推奨される。

3. 申 請 書

派遣希望者は、会員番号、氏名、所属、連絡先（住所・TEL・FAX・E-mail）、年齢、性別、専門分野、希望派遣学会等（開催会議等の名称、主催者名、開催月日、開催国・地名、会議等の目的・内容、現地見学会の有無と内容、参加申し込み期限、参加費、研究発表を行うか否か（その形式）、案内パンフレット等がありましたらそのコピーをお送りください）、および派遣希望理由（上記の「3）選考基準」の各項目）を、A4 計 2 枚以内（書式自由）にまとめ、下記の宛先へ郵送・FAX・E-mail 等にて学会事務局に申し込みください。申請書は日本語あるいは英語で記載してください。

住所：〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405 号室

FAX：03-5216-8520, E-mail: eces-manager@ecesj.com

なお、4 月以降に所属が変わる場合は、4 月以降の連絡先も付記してください。

4. 申 込 期 間

2023 年 3 月 1 日（水）～ 3 月 31 日（金）事務局必着

5. 派遣決定時期

2023 年 4 月下旬までに決定します。

6. 派遣を推奨する国際学会およびシンポジウム（以下の国際学会が主催する国際会議）

- Annual Meeting of Society for Freshwater Science (SFS)
- American Geophysical Union (AGU)
- Association for the Society of Limnology and Oceanography (ASLO)
- European Geosciences Union (EGU)
- International Society for Ecological Modelling (ISEM)
- International Society for River Science (ISRS)
- International Water Association (IWA)

なお、上記以外の国際学会やシンポジウムも応募可能です。

4 行事開催報告

4.1 2022 年度 若手のつどい勉強会 in 福岡

報告者：応用生態工学会若手の会

石山信雄（北海道立総合研究機構）

1. 応用生態工学会若手のつどい勉強会2022「－ 河口と干潟：ハビタットを見る目、紐解く技術 －」の概要

応用生態工学会若手の会は、若手の行政担当者、技術者、研究者の垣根を超えた連携とレベルアップを図るため勉強会を定期に開催しています。2022年度の勉強会の開催地は福岡県でした。現在、福岡県の魚類も絶滅が危惧されている種が多くいますが、そうした絶滅危惧種の貴重な生息場の一つが汽水域になります。応用生態工学会若手のつどい勉強会 in 福岡では、県内の複数の汽水域を講師の方々と回り、「河口と干潟：ハビタットを見る目、紐解く技術」に参加者の方々に養って頂くことを目的としました。今年度の勉強会の構成は、1日目が座学、2日目がフィールドワークと致しました。また座学については、現地に来られない方でも聴講できるよう、現地とオンライン両方での視聴が可能なハイブリッド開催と致しました。

2. 勉強会の内容

■座学

【日 時】2022（令和4）年10月24日（月）13:00～17:00

【場 所】九州産業大学 3号館＋オンライン配信 【参加人数】71名（内、現地参加17名）

【発表内容】

（午前：若手研究者・技術者からの研究発表）敬称略

- ・「研究紹介：環境DNAの性質や動態に関する基礎研究」 相馬寿明（龍谷大学）
- ・「UAV空撮画像を活用した河道内に繁茂する竹林の樹頂点の抽出」 溝口裕太（土木研究所）
- ・「砂床河川における裸地砂州への植生初期侵入機構」 周月霞（名古屋大学）
- ・「陸-海域の物質循環に関する研究紹介～北海道知床羅臼川流域を例として～」 丸谷靖幸（九州大学）
- ・「宮崎県耳川における連携通砂による底生動物への影響に関する研究紹介」 糠澤桂（宮崎大学）
- ・「福岡県内汽水域における希少ハゼ分布の変化と現状」 松島宏太（九州大学）
- ・「アユの産卵場に関する研究」 井原高志（西日本技術開発株式会社）

（午後：講演会）

- ・「積極的・戦略的多自然川づくり：魚類学者の視点」

九州大学大学院生物資源環境科学府附属水産実験所 鬼倉徳雄 教授

- ・「水工学的視点からみた河川汽水域の環境構造と生物相」 東京工業大学 巖島怜 助教
- ・「川づくりのデザインを変える最新3次元技術」

山梨大学大学院総合研究部（応用生態工学会若手の会 会長） 大槻順朗 助教

【概要】

午前の部では、全国で活躍される若手研究者・技術者の方々から、ダム通砂が下流域の河川生物相に与える影響、最新の環境DNA技術、河畔植生の侵入規定要因の解析、アユ産卵場の再生事業の効果検証、物質循環を介した陸-川-海のつながりの事例、など幅広い内容をご紹介頂きました。また午後の講演会

では、九州地域の河川での魚類分布の現状や生息場再生の事例、汽水域のハビタット区分や各ハビタットを特徴づける環境要因、近年多自然川づくりの現場で注目されている3次元データを活用した河川デザインなどを各講師から説明頂くことで、参加者は生物が棲みやすい川づくりに必要不可欠なコンセプトやツールについての基礎情報を共有するだけでなく、研究者と行政担当者の関わり方に至るまで忌憚なき議論を交わしました。

■フィールドワーク

【日 時】2022 (令和 4) 年 10 月 25 日 (月) 8:30~17:00

【場 所】遠賀川魚道公園 (福岡県遠賀郡)、奥畑川 (福岡県北九州市) 【参加人数】23 名

【概要】遠賀川魚道公園は、2013 (平成 25) 年に遠賀川河口堰に設置された魚道を中心とした水辺公園です。生物移動の経路となるだけでなく、流れや塩分勾配によって魚道自体が多様な生息場を提供しています。観察や生物採集などを通じ、形成された河川環境・生物の特徴を学習しました。午後からは標高、底質、塩分等の異なる多様な環境が狭い範囲に内包された奥畑川河口干潟を観察し、汽水魚の採集や生息場の特性、UAV による汽水域の観測法などについて学習しました。現地での解説は、鬼倉徳雄教授のほか乾隆帝教授、伊豫岡宏樹助教に担当していただきました。遠賀川河川事務所の皆様には魚道と河口堰の解説で大変お世話になりました。



研究発表会・講演会の様子



現地視察の様子 (上段：遠賀川魚道公園、下段：奥畑川)

3. 今後の予定

若手の会の集いはどなたでも参加頂けます。開催案内は若手の会メーリングリストや HP でお知らせしますので、ぜひご参加ください。

【若手の会 HP】<https://www.ecesj.com/contents/youth/index.html>

4.2 第 12 回 全国フィールドシンポジウム in 天野川 (滋賀県)

琵琶湖に注ぐ天野川を歩み、現存する霞堤・遊水地、豊かな生物の生息環境やひとの営みから、今後の流域管理への理解を深める -

報告者：応用生態工学会 普及・連携委員 (大阪)

山田啓介 (八千代エンジニアリング株式会社)

開催趣旨

近年、気候変動による影響や社会状況の変化を踏まえ、水災害により施設能力を超過する洪水が発生することを前提とし、あらゆる関係者が協働して流域全体で行う治水対策である「流域治水」が推進されています。

流域治水の施策には、霞堤や遊水地といった伝統的に地域を守ってきた工法も含まれており、昨今の甚大な洪水被害を受け、重要性が再認識されつつあります。また、霞堤や遊水地のある環境に成立する生物相はしばしば多様度高く、生物多様性の面でも重要な場所です。しかし、これらの治水工法は普段目にすることが少なく、一部でその機能が失われているのが現状です。これらの背景を踏まえ、本シンポジウムは、天野川流域におけるひとの営みの中で現存する霞堤や遊水地等の伝統的治水工法を見学したうえで議論をし、今後の流域管理への理解を深めることを目指しました。



天野川

応用生態工学会の全国フィールドシンポジウムは、令和元年の第 11 回開催以降、コロナウィルス感染症により延期していました。コロナウィルスの収束の目途は立っていませんが、昨今の社会情勢を踏まえ、本シンポジウムはウィズコロナ/アフターコロナを見据えた『コンパクトな全国フィールドシンポジウム』として、これまでの 2 日間の開催工程を 1 日とし、密を回避するため徒歩で現地を移動して見学を行う開催様式としました。



フィールド見学の実施箇所 (黄色実線：踏査ルート)

第 12 回全国フィールドシンポジウム概要

【開催日時】：令和 4 年 11 月 4 日(土) 9:00～16:00

【開催場所】：滋賀県米原市 (天野川、米原市役所コンベンションホール)

【テーマ】：「琵琶湖に注ぐ天野川を歩み、現存する霞堤・遊水地、豊かな生物の生息環境やひとの営みから、今後の流域管理への理解を深める」

【参加者】：計 43 名 (フィールド見学+座学 | 現地+Web の合計)

【プログラム】：当日のプログラムは以下のとおり

➤ 午前の部：フィールド見学

【出発】JR 坂田駅→天野川を歩いて、霞堤や遊水地等を見学→【到着】醒ヶ井

➤ 午後の部：座学

「霞堤からひも解く流域治水と生態系ネットワーク」

午前の部：フィールド見学

【日 時】令和 4 年 11 月 4 日(土) 9:00～14:30

【場 所】天野川

【参加人数】27 名

【概 要】徒歩により天野川流域に現存する伝統的治水工法の霞堤や遊水地等を見学

■出発前の留意事項・みどころの説明

当日、参加者は 9 時に JR 坂田駅へ集合し、出発前にフィールド見学に係る留意事項やみどころの確認を行いました。

みどころについては、滋賀県立大学の瀧健太郎先生にご説明いただきました。天野川及びその周辺に存在する伝統的治水工法である霞堤、遊水地、輪中堤及び避溢橋並びに棚田式魚道等の場所や由来などについて詳しく解説いただきました。



集合時の風景（上）と
瀧先生による解説（下）

■フィールド見学

JR 坂田駅を出発し、終着点である上流側の醒ヶ井を目指して天野川沿いを歩きました。距離は 6～7 km ありましたが、随所にあるみどころを見ながらゆっくり歩いていきました。事前に配布された見どころマップをみつつ、瀧先生には霞堤や遊水地等、琵琶湖博物館の中井克樹先生には生物に関する解説を所々で行っていただき、とても勉強になりました。

霞堤や遊水地は、教えてもらわなければわからないくらい自然に溶け込んでおり、周辺の景観と見比べても変化のわかりにくいものでした。また、輪中堤は切欠き部が生活道路として利用されており、出水時に止水版を設置するというものでした。いずれも、地域のひとの営みに溶け込んだ治水工法であることを実感しました。



避溢橋（上）、輪中堤

■昼食・醒ヶ井散策

終日参加する方は、午後の座学に向けて、午前のフィールド見学の終着地である醒ヶ井で昼食を取りました。昼食会場は、地産地消の郷土料理を提供している日本料理店「樋口山」です。趣のある店構えに加え、敷地内には湧水の池があり、「ハリヨが繁殖することがある」と店主よりご説明がありました。参加者は、米原で採れた米や野菜、付近の養鱒場で育ったマスの刺身、近江牛などの地場の食材に舌鼓を打ちました。



「樋口山」の湧水起源の池

午後の座学までの空いた時間で、各々が自由に醒ヶ井を散策しました。醒ヶ井は湧水の町であり、付近には湧水に関連した史跡、市指定文化財や国指定天然記念物など様々なみどころがあります。また、樋口山の店先を流れる地藏川では、11 月にも関わらずバイカモが開花していました。中井先生からは、地藏川や周辺地域の生物多様性に関する解説もしていただき、充実した時間を過ごすことができました。



中井先生による解説と地藏川で開花していたバイカモ

午後の部：座学

【日 時】令和 4 年 11 月 4 日(土) 14:30～16:00

【場 所】米原市役所コンベンションホール

【参加人数】39 名（対面：25 名、Web:14 名）

【概 要】

■「霞堤からひも解く流域治水と生態系ネットワーク」

午後の座学は、中井先生の司会進行のもと進められました。午前に自分の足で実際に霞堤、遊水地や輪中堤などを見た感覚を持ちつつ、「霞堤からひも解く流域治水と生態系ネットワーク」と題して、瀧先生にご講演いただきました。

一口に流域治水といえども、そこには国や県の施策、法令、歴史、生物やそこに住む人々の暮らし、受益と負担の関係など、様々な要因が交錯しています。それらを丁寧にわかりやすく解説いただくとともに、午前に実際の霞堤や遊水地を見たばかりであることも相まって、内容をととても良く理解することができました。

参加者からは、「霞堤を守るための取り組みとして減税などの手段が有効であるかもしれないことが良くわかった」、「これまで地域で守られてきた霞堤を今後も地域で守っていけるような枠組みはあるのか?」、「農地以外で霞堤が活きる土地利用があるのか?」といった意見や質問が挙げられました。

公演の最後に瀧先生が「流域治水の制度はできたものの、明日・明後日で成るものでは無い。前から取り組まれていたことが、最近になって法律で位置付けられたという面もある。総動員の流域治水なので、みんなと一緒に考えて行動して行けたら良い」と総括されました。今回のシンポジウムは、あらゆる関係者が協働して流域治水を考えていく一助になったとともに、今後の流域管理の議論に向けた理解がたいへん深まったと感じました。



シンポジウム開催風景



司会進行 中井克樹氏



演者 瀧健太郎氏

おわりに

例年の開催様式とは異なる会になりましたが、多く方にご参加いただき、事故やトラブルもなく終えることができました。

開催にあたり、関係者の皆さまには多大なご支援を賜りました。特に本シンポジウムの開催を全面的にご支援いただき、フィールドでの解説や座学でご講演いただいた滋賀県立大学の瀧先生、座学の司会進行をお引き受けいただいた琵琶湖博物館の中井先生には、心より感謝申し上げます。

最後に、今回のフィールドシンポジウムの準備・運営にご尽力いただいた実行委員会の皆さまや当日の運営にご協力いただきました皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



フィールド見学のーコマ

4.3 応用生態工学会金沢 「トキを育む里山づくり」

開催日時: 令和4年11月25日(金) 13:30~16:00

会場: ITビジネスプラザ武蔵 6階交流室

報告者: 応用生態工学会金沢 普及・連携委員

平野 博範 (株)国土開発センター

1. はじめに

今年の「応用生態工学会金沢 研修会」は、対面と Zoom による WEB ハイブリッド方式で開催しました。本研修会ではトキに着目し、「トキを育む里山づくり」をテーマとし、その生息環境を再生するために、どのような政策や手法が必要なのかについて 5 人の方に講演していただきました。

参加者は約 110 名となり、多くの皆様にご参加いただき、盛会裡に終えることができました。講師の方をはじめ参加者の皆様、関係者の皆様のお陰であり、心よりお礼申し上げます。

以下、開催状況を報告します。

2. 開会挨拶・趣旨説明

開会挨拶・趣旨説明は、応用生態工学会金沢の会長である柳井清治氏が行いました。

本年 8 月、国の特別天然記念物のトキについて、環境省は放鳥と定着を目指すための候補地として石川県の能登半島地域と島根県出雲市を選定しました。本県の能登半島は本州最後のトキの生息地であり、1970 年まで生息していました。そのトキを復活するためには、エサ場となる田んぼや小川などの水辺空間、巣やねぐらとなる林など多様な環境が必要です。その環境を再生するためにはどのような政策や手法が必要なのかを、皆さんと一緒に考えてゆきたいとの開催趣旨を説明されました。

3. 事例発表

1) 「トキ野生復帰の試み」:

国連大学OUIK所長 渡辺 綱男 氏

佐渡市ではトキ野生復帰ステーションが2007年に整備され、2008年から放鳥を開始している。現在までに27回、計462羽のトキを放鳥しており、初めの放鳥から4年間は雛が孵化することはなく、野生復帰に向けて試行錯誤が続いた。その苦労があつて2012年に初めて野生下で雛が誕生し、それ以降は、野生復帰が順調に進み、これまでに153羽の雛がかえっている。

トキは、ドジョウ、ミミズ、水生昆虫などの餌が豊富な水田が広く分布するところで定着することから、佐渡市ではトキの餌場確保と生物多様性の米づくりを目的とした「朱鷺とくらす郷づくり認証制度」を2007年に立ち上げている。

トキの野生復帰には、地元の理解と協力が不可欠である。地元の人々は、トキが自分の田んぼに飛来するのを見て、トキが棲みやすい田んぼづくりを行うように意識が変化した。現在では、農薬や化学肥料の使用は半分以下とし畔では除草剤を使わないなど、トキと共存する稲作を地域一体となって取り組んでいる。



2) 「北陸地方での生態系ネットワークの取り組みについて」:

国土交通省北陸地方整備局河川部河川計画課長 高橋 恵理 氏

国土交通省では、河川を基軸とした生態系ネットワークの形成にむけて取り組みを行っており、越後平野での取り組みについて紹介する。越後平野において生態系ネットワークの形成に取り組む目的は、河川や田園、里潟等の水辺の生物多様性の保全・再生及び地域振興・経済活性化である。生態系ネットワークの形成により、生物多様性の確保を図り、人と自然との触れ合いの場を提供することで、地域に社会面・経済面において様々な効果をもたらすことを期待している。越後平野における生態系ネットワークの指標種として、ハクチョウ類、ガン類、トキを選定しており、指標種の生息環境の保全・再生に向けた地域間の情報交換や様々な活動を通じて、生態系ネットワークの形成を実現していく。

具体例としては、信濃川中流での遊水地の整備や信濃川下流での河道掘削による湿地環境の再生や、阿賀野川でのワンド・浅場の再生等を行い、採餌場やねぐらの確保を目指す。この他、国土交通省では安全で安心な地域づくりを目指して流域治水プロジェクトに取り組んでおり、これにグリーンインフラがもたらす多面的な効果を期待して、流域治水×グリーンインフラとして様々な取り組みを進めている。



3) 「いしかわのほ場整備における環境配慮の取り組みについて」:

石川県農林水産部農業基盤課専門員 上原 良太 氏

石川県では農作業の作業効率改善や担い手不足の解消等のために、ほ場整備を実施している。一方で、水路や水田を生息・生育地とする生物に対しては、移動経路の分断、生息環境の減少などの影響を与えている。

このため、石川県では「いしかわ ほ場整備環境配慮指針」を策定し、環境配慮に取り組んでいる。ほ場整備における具体的事例としては、水路によどみや深みをつくり、泥を堆積させて生き物の生息場を確保したり、山際では山林と水田の移動経路を確保したり。また、ビオトープや調整池等の水辺空間を創出するなどの環境配慮を実施している。令和4年8月にトキの定着に向けた放鳥候補地として能登地域が選定されたことを受け、トキが生息できる環境づくりに向けて、関係市町ではトキの餌となる生物の生息環境の整備を先行的に取り組む地域をモデル地区として設定することとしており、県においてもモデル地区における取組に対して費用面で支援をすることとしている。



4) 「トキの野生復帰に向けた能登での取り組み」:

朱鷺棲む里山鉦打クラブ代表 唐川 明史 氏

朱鷺棲む里山鉦打クラブは、「自然と人間が共生する豊かな環境をめざして・・・」を事業目的に掲げ、35名(令和4年4月1日現在)で活動を行っている。

活動内容としては、昭和36年にトキの営巣が確認された須久保(熊



木川上流) 周辺の環境を知ることが目的とした環境調査や講師を招いてトキについての勉強会等を行っている。令和 4 年に開催した総会では、村本氏から能登半島にトキが生息していたことを子供たちに伝えるために建設した「朱鷺の資料館」についての話があった。

トキを守っていくためには、トキの餌場を守ることが重要であり、そのためには餌場となる水田を管理している地域住民から理解を得る必要がある。このため、日頃から地域住民と積極的にコミュニケーションをとり、良好な関係を築いていくことが大切である。

5) 「佐渡でのトキ野生復帰の取り組みと、能登で必要なこと」:

石川県立大学准教授/元新潟大学朱鷺・自然再生学研究センター 上野 裕介 氏

トキの野生復帰には様々な人が関わることとなる。それぞれの立場や生活があり、それらすべてを尊重しながら進めていくことが大切である。佐渡では、トキの存在をきっかけとして、地域住民の土地への向き合い方が良い方向へ変化していくことを経験した。

現在では、トキの営巣木の特徴や採餌場所の選好性等、トキの生態が明らかとなってきたおり、トキの野生復帰の取り組みには、優先的に環境保全・自然再生を行うエリアや人間活動を優先するエリアなど、重みづけをしていくことが重要である。また、協議会の活動のほか、生き物調査で子供と一緒に活動することによる意識づけも重要である。

一方、トキの野生復帰に向けた懸念としては、脱炭素の推進（風力発電）と自然再生の両立、農業者負担の軽減（肥料、農薬の減量等）とトキの餌場づくりの両立が考えられ、これらの課題解決も重要と考えている。



4. 総合討論(上野 裕介 氏)

総合討論は、石川県立大学 上野裕介准教授がコーディネーターとなり、「1. 人々の想い」、「2. 生き物の視点」、「3. 誰が野生復帰を担うのか」の 3 つの話題について、聴講者からの質疑を交えながら、講演者 4 名と討論を行いました。以下に、講師の方の主な意見を記載します。

国連大学OUIK所長 渡辺 綱男 氏

佐渡の子どもたちは、学校給食でトキの認証米を食べており、これを親や親戚に話すことが活動に繋がっている。このように、認証米作りやそれを支援する仕組み作りを能登ではどう進めていくのかが今後の課題である。近年では、ネイチャーポジティブ（生物多様性の損失を食い止め、回復させる）が主流となりつつあり、佐渡では「ネイチャーポジティブ佐渡島宣言」を出した。能登でも、トキだけでなく、地域住民の営みも輝いていけるような取り組みを検討することが望まれる。

国土交通省北陸地方整備局河川部河川計画課長 高橋 恵理 氏

生態系ネットワークの推進にあたっては、検討部会等を通じて関係市町村に取り組みの有用性を理解いただくとともに、銀行等にも参加してもらい経済面からの意見も得ながら事業を推進していきたいと考えている。新潟の越後平野の生態系ネットワークの取り組みについては始まったばかりであり、能登をはじめ他地域での取り組みを参考にしながら進めていきたい。

石川県農林水産部農業基盤課専門員 上原 良太 氏

トキの生息環境保全にあたり、農家への負担をどう軽減するかが課題となる。石川県農業政策課農業参入・経営戦略推進室は農業に参入する企業を支援しており、里山振興室では地域の見守り隊といった活動を実施している。こういった取組の中で何かできないかについて必要に応じて検討していく。

朱鷺棲む里山鉋打クラブ代表 唐川 明史 氏

継続は力なりであり、住民の認識を高める活動を継続的に実施する必要がある。また、高齢者は孫の意見をよく聴く傾向にあるため、子供たちに対しては学校での生物多様性に関する環境教育が大切である。この他に、稲作については、減農薬での栽培ができないかを検討していくことが大切である。また、実際に能登に来てもらい、あぜ道の草刈り体験や、農村での宿泊、食事を通じて能登を知ってもらおうといった取り組みも考えられる。

石川県立大学准教授/元新潟大学朱鷺・自然再生学研究センター 上野 裕介 氏

トキの営巣適地の予想と実際の営巣地との一致に関するご質問ですが、よく一致していました。ただし、個体数が増えると予測した場所以外でも繁殖し、営巣地が広がっているのが現状ですので、トキの個体数が少ない時のベストな予測適地を予測したと考えています。コウノトリの飛来に対するトキの生息への影響については、コウノトリの方が、個体サイズが大きいためトキが採食している餌場にコウノトリが飛来すると、トキは追い出される。ただし、コウノトリは個体数が少ないので、トキは追い出されても近くの別の餌場で採食できる。営巣場所はトキとコウノトリで営巣環境が異なるため、すみ分けが可能であると考えています。

5. 閉会挨拶

閉会挨拶は、応用生態工学会金沢の副会長である西出保氏が行いました。

様々な事例をご紹介いただきありがとうございました。コロナ禍のため、ハイブリッド形式での開催となりましたが、皆様のおかげで無事終了することができ、ありがとうございました。

本研修会を通して今後の能登地域におけるトキの放鳥にあたりましては、佐渡での経験から学び、ネイチャーポジティブの考え方を取り入れつつ、専門家、行政、地域住民等との協力・連携により様々な観点からの取り組みが重要となることを感じました。

参加された皆様のご健勝を祈り、閉会の挨拶とさせていただきます。

4.4 応用生態工学会福井

地域勉強会 in 福井 福井県におけるコクチバスの分布状況と駆除事業の現状

開催日時:令和 5 年 1 月 21 日(土) 14:00~16:00

会場:福井県立大学永平寺キャンパス 交流センター

報告者: 応用生態工学会福井 埴田 照代

1. はじめに

3 年ぶりの開催となる本年度の勉強会は、特定外来生物のコクチバスの生態や国内での分布状況、九頭竜ダムで実施されている駆除事業の効果などについて学び、外来種の現状や調査・対策手法などについて意見交換を行うことを目的に開催されました。勉強会は令和 5 年 1 月 22 日に福井県永平寺町の福井県立大学永平寺キャンパスを会場として開催し、同時にオンラインによる参加も受け付け、技術者や行政担当者、研究者、漁協、地域住民など計 53 名の方にご参加をいただきました。

当日は、司会の田安正茂氏（福井工業高等専門学校 教授）の進行の下、最初に田原大輔氏（福井県立大学 教授）から本勉強会の趣旨説明があり、その中で、福井県では 2007 年に九頭竜ダムでコクチバスが初確認され、その後ダムの下流河川で確認情報が出ているが、情報が不十分で県内でのコクチバスの生息実態については不明な点が多いことなどが情報提供されました。

2. 千曲川のコクチバス ～最近の動向と対策～

北野 聡氏（長野県環境保全研究所 主任研究員）

本講演では、長野県内を流れる千曲川におけるコクチバスの生息調査や駆除活動についてご紹介いただきました。千曲川では 2002 年にコクチバスが初確認され、その後、生息数が増加していったそうです。現地調査の結果、コクチバスは河川内でもトロやワンドなど流れの緩い場所でよく捕獲されること、魚食性が強いが、流れの強い場所では、カゲロウ類やトンボのヤゴ、ワンドでは小型の魚類などを捕食しており、生息環境や体サイズによって餌を変えていることが明らかになったとのことでした。

生息個体数の増加に伴い、地元漁業協同組合、行政機関、専門家が協力して、小型三枚網や電気ショッカーなどを利用した駆除活動や、釣りで捕獲された個体を買収する制度の運用も行われ、一定の効果があつたことが報告されました。



北野 聡 氏

令和元年の東日本台風による大出水では長野市で堤防が決壊するほどの災害が発生し、多くの魚類が流されてしまったそうですが、その後、在来種の個体数は戻っていきっている一方で、コクチバスは現在もほとんど確認されないとのことで、非常に興味深いと思いました。

今後も継続的な監視や調査が必要であること、地元の漁業協同組合では調査や駆除作業の担い手不足などが課題であるという点については、本県も同じ状況であると感じました。

3. 福井県九頭竜湖におけるコクチバス調査について

山田 洋雄氏（福井県内水面総合センター 所長）

本講演では九頭竜ダムで平成 24 年から実施されているコクチバスのモニタリング調査や駆除事業につ

いてご紹介いただきました。

モニタリング調査では、春は目視や潜水による産卵状況調査、夏～秋には大型刺網による生息状況調査をダム湖内の 88 地点で実施し、主な産卵場所や生息密度の高い地点が解明されてきたそうです。また、平成 30 年から 3 年間、産卵時期にダム湖の水位を 3m 低下させて、産卵床や稚魚を干出する駆除事業が実施され効果が出ているそうですが、ダム管理者にとってはコストが高い、水の需要を満たせなくなる等のリスクがあることが継続的に実施していく上での課題ということでした。

平成 24 年から行われている駆除イベントでは、漁業協同組合、行政、釣り愛好家など 30 名位のボランティアで行われており、多い年で 300 尾程度が駆除されたそうです。

今後は、稚魚期や非繁殖期の生息場の特定と駆除、刺網以外の駆除方法の検討、下流河川へのしみ出しの監視などが重要な課題となるということが報告されました。



山田 洋雄 氏

4. 国土交通省、福井県によるコクチバスの生息調査(速報)

森田 一彦氏（国土交通省 福井河川国道事務所 総括保全対策官）

本講演では、今年度の河川水辺の国勢調査として行われた、九頭竜川水系の魚類調査の生息調査結果について報告がありました。2022 年秋に九頭竜川水系の国管理区間と県管理区間の計 13 地点で行われた魚類調査では、コクチバスは確認されませんでした、上流の九頭竜ダム、真名川ダムではコクチバスが確認されました。

秋季には下流河川の 3 地点で環境 DNA 分析も実施されましたが、コクチバスの DNA は検出されなかったそうです。環境 DNA 調査については水の採取方法や時期など検討課題はあるものの、多くの地点の調査を同時にかつ簡易的に行えるため、うまく利用できれば、今後、コクチバスをはじめ魚類調査の一手法になっていくのではないかと感じました。

5. 意見交換会

意見交換会では、会場でご講演をいただいた 2 名の講師の方を中心に、応用生態工学会福井の田中謙治氏によるファシリテーションの下、会場の参加者を交え活発な質疑応答が行われました。

漁業関係者からは、コクチバスによるアユへの影響について質問があり、他県では放流直後には多く捕食されている事例があるとのことでした。また、会場の参加者からは、駆除活動を継続的に行っていくことの難しさについての意見があり、講師からは県や市町といった行政と連携して活動していくことが重要との助言をいただきました。



意見交換会の様子

6. さいごに

今回の勉強会は福井県内ではまだ情報が少ないコクチバスの現状について、参加者で情報共有することも目的の一つとしておりましたが、本勉強会をきっかけに、様々な立場の関係者がコクバス駆除の重要性について再認識していただき、次は実際に駆除活動に参加するといった活動に繋がればと思いました。

最後に、今回の勉強会にご後援いただきました国土交通省福井河川国道事務所、福井県、北陸技術士懇談会、福井県内水面漁業協同組合連合会、ふくい里川研究会、そして日頃から応用生態工学会福井の活動にご参加いただいている県内のコンサルタント、建設資材メーカー、建設会社、NPO、行政等の技術者の皆様に厚く御礼申し上げます。

4.5 応用生態工学会福岡 第 9 回遠賀川中島自然再生勉強会

報告者：応用生態工学会 福岡

齋藤 剛（西日本技術開発(株)）

1. 遠賀川中島について

中島は、九州北部、一級河川遠賀川の下流に位置する中州で、国土交通省遠賀川河川事務所により遠賀川中島自然再生事業が行われました。自然再生事業では、遠賀川の流域や河川で失われた湿地を創出し、多様な生物が生息・生育する河川環境を再生することを目的に、掘削による湿地の再生やヨシ原の保全などを行い、次世代に引き継ぐ未来の遠賀川の川づくりが行われました。

2. 遠賀川中島自然再生勉強会の概要

応用生態工学会福岡では、平成23年度から「遠賀川中島自然再生研究会」を立ち上げ、遠賀川河川事務所より中島を研究フィールドとして提供頂き、学会員を中心とする研究会メンバーにより、応用生態工学的な研究を進めてきました。

平成30年度からは、名称を「遠賀川中島自然再生勉強会」に改め、自然再生協議会、流域住民団体、遠賀川河川事務所、学識者、コンサルタント等で活動や調査結果を共有し、今後の中島について議論しています。令和4年度は4年ぶりに対面（WEB併用）で勉強会を開催し、フィールドワークでは平成30年度から実施している火入れ箇所において、外来植物の駆除と延焼材としての活用等について学びました。

・遠賀川中島自然再生勉強会 役員（敬称略）

会長：鬼倉徳雄(九州大学) 副会長：皆川朋子(熊本大学)、林博徳(九州大学)

3. 実施内容

■勉強会

【日 時】令和 5 年 2 月 5 日（日）10:00～12:30

【場 所】遠賀川水辺館めだかホール【参加人数】37 名

【演題・発表者】（敬称略）

- ・中島自然再生協議会活動報告（中島自然再生協議会 岡山昭明）
- ・火入れ実施状況（遠賀川河川事務所 大坪摩耶）
- ・中島モニタリング調査結果報告（西日本技術開発(株) 山根明）
- ・遠賀川エコロジカルネットワーク再生事業報告（(株)建設環境研究所 竹本進）
- ・遠賀川オオキンケイギク駆除の取り組み（遠賀川河川事務所 宮原彰）
- ・オンガスジシマドジョウの年齢と成長（九州大学 永江栞奈）
- ・生物を増やすための湿地再生の視点（福岡県保健環境研究所 中島淳）
- ・全体意見交換（座長 九州大学 鬼倉徳雄）

【発表概要】中島自然再生協議会活動報告では、岡山様から中島の竹を利用した炭作り、外来種駆除活動、自然観察会、清掃活動等について報告があり、参加者からは自然観察会や清掃活動等の熱心な取り組みに感銘の声が聞かれました。

遠賀川河川事務所の大坪様と西日本技術開発(株)の山根様からは、中島の植生調査結果と平成30年度か



ら実施されている火入れの状況について報告があり、自然再生後の植生遷移とヨシ・オギ群落を維持するための取り組みについて学びました。

(株)建設環境研究所の竹本様と遠賀川河川事務所の宮原様からは、遠賀川流域全体の取り組みを紹介いただき、エコロジカルネットワーク再生事業における住民との協力や、関係団体が協力して実施しているオオキンケイギクの駆除からは、今後の中島維持管理のヒントを多数いただきました。

九州大学の永江様からは、遠賀川固有種であるオンガスジシマドジョウの生態についてご紹介いただき、身近な川が貴重な生物の生息場所になっていることを再確認しました。

福岡県保健環境研究所の中島様からは、生態系を保全する意味と、エコトーンや湿地の重要性等について丁寧にご教授いただき、自然再生・湿地再生について理解を深めました。

全体意見交換では、過去に中島に住まれていた方の話、普段の活動の意味をより深く理解したとの感想、ヨシ原の維持の難しさについての質問等があり、活発に意見交換が行われました。



勉強会の様子

■フィールドワーク

【日 時】令和 5 年 2 月 5 日（日）13：30～15：00

【場 所】遠賀川中島

【実施概要】フィールドワークでは、西日本技術開発(株)の山根様から、外来種ナンキンハゼの駆除試行について紹介いただき、環状剥皮による駆除時の留意点等についてご指導いただきました。

次に、3月に実施予定の火入れに向けて、全員で火入れ箇所のセイタカアワダチソウを抜根し、延焼材として配置していきました。参加者からは抜根のコツや抜根数を競う声も聞かれ、3月には効果的な火入れが実施できることを期待し、勉強会を閉会しました。



フィールドワークの様子

4. 今後の予定

遠賀川中島自然再生勉強会は隔年で開催しており、次回は 2024 年度の開催を予定しています。勉強会の開催案内は学会メーリングリスト等でお知らせしますので、ぜひご参加ください。

5 理事会・幹事会報告

5.1 第 121 回理事会（Web 会議）報告

第 121 回理事会（Web 会議）が 2 月 28 日に開催され、審議結果は次のとおりです。

1. 次期役員募集・推薦委員会委員の指名

2023 年度は 2 年に 1 回の役員改選の年に当たり、学会規約、学会規約細則、次期役員募集・推薦委員会規程に基づき第 14 期役員を選出いたします。

学会規約細則第 5 条の規定に基づき第 14 期次期役員募集・推薦委員会を設置することとし、委員長、委員として次のとおり指名することが承認されました。

委員長	占部 城太郎	第 13 期会長
委員	甲村 謙友	第 12 期会長
委員	江崎 保男	第 11 期会長
委員	辻本 哲郎	第 10 期会長

2. 故廣瀬利雄元会長からの寄付の管理及び使途について

故廣瀬利雄元会長からの寄付については、第 118 回理事会・第 95 回幹事会合同会議（令和 4 年 9 月 23 日）における審議で、受け取ることが承認されました。このことを受けて、今後の管理及び使途について審議が行われました。審議の結果、本件に関する具体案を作成するための検討ワーキンググループを設けること、このワーキンググループが作成した提案を、理事会で審議し、決定していくことになりました。

3. 学会の法人化について

学会組織の法人化について審議を行い、検討を進めることが承認されました。本件についても、ワーキンググループを設けて検討を行うことが決定されました。

6 2022 年度行事の経過と今後の予定

2022 年度(令和 4 年度)行事経過と今後の予定

4. 1	2022 年度 (令和 4 年度) 開始
4. 7～15	第 115 回理事会 (メール会議)
4. 16	第 5 回 ELR2022 実行委員会
4. 26	ニュースレター96 号発行
5. 11	第 93 回幹事会
6. 9	第 116 回理事会
6. 22	ニュースレター97 号発行
7. 13	第 94 回幹事会
8. 4	第 117 回理事会
8. 25	ニュースレター98 号発行
8. 31	会誌「応用生態工学」Vol. 25-1 発行
9. 20～23	3 学会合同大会 (ELR2022 つくば) 開催 (つくば国際会議場) 9 月 20 日 (火) : エクスカーション 9 月 21 日 (水) : 各種委員会、研究集会、公開シンポジウム 9 月 22 日 (木) : 研究発表、企業展示、研究集会 9 月 23 日 (金) : 研究発表、企業展示、研究集会、各学会総会、 大会期間中に総会、幹事会、理事会、各委員会を開催
10. 31 ～11. 28	第 96 回幹事会・第 119～120 回理事会 (メール会議)
11. 11	ニュースレター99 号発行
1. 13	第 97 回幹事会
2. 28	会誌「応用生態工学」Vol. 25-2 発行
2. 28	第 121 回理事会
3. 3	ニュースレター100 号発行
3. 31	2022 年度 (令和 4 年度) 終了

2023 年度(令和 5 年度)行事の予定

4. 1	2023 年度 (令和 5 年度) 開始
5 月	ニュースレター101 号発行
5 月	幹事会
6 月	理事会
7 月	会誌「応用生態工学」Vol. 26-1 発行
7 月	ニュースレター102 号発行
7 月	幹事会
8 月	理事会
9. 20～23	応用生態工学会第 26 回大会 (京都大会) (京都大学宇治キャンパス) 9 月 20 日 (水) ～22 日 (金) 公開シンポジウム、口頭発表、自由集会、ポスター発表、 9 月 23 日 (土) エクスカーション 大会期間中に総会、幹事会、理事会、各委員会を開催
1 月	幹事会
1 月	ニュースレター103 号発行
2 月	会誌「応用生態工学」Vol. 26-2 発行
2 月	理事会
2 月	ニュースレター104 号発行
3. 31	2023 年度 (令和 5 年度) 終了

7 事務局より

7.1 住所等の連絡先変更の場合は連絡をお願いします

1. 会員情報の変更登録は、学会ホームページトップ画面右上の「入退会・登録変更・購読」バナーから入り、「会員登録情報変更フォーム」に入力し送信してください。
2. 下記 URL で「会員登録情報変更フォーム」へ直接接続することもできます。
<https://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change>
3. 会員情報変更のご連絡は、学会事務局 eces-manager@ecesj.com にメールをいただくことでも可能です。

会誌のお届け、ニュースレター、その他の連絡では、かなりの「不達が発生」しています。
 よろしく願いいたします。

7.2 退会の申し出は退会フォームからお願いします

退会の申し出については、事務局の見落とし等をさけるため、①「学会ホームページ退会フォーム」または ②「事務局あてに退会の連絡メール」により連絡をお願いいたします。

7.3 会員数および LEE 購読者数

2023 年 3 月 1 日現在

	会員数	対前年同時期比較	LEE 購読者数
名誉会員	10 名	減 1 名	2 名
正会員	883 名	増 12 名	※61 名
学生会員	96 名	増 11 名	3 名
合 計	989 名	増 22 名	66 名
賛助会員	46 法人 (65 口)	増 2 法人 (増 2 口)	

※賛助会員 1 社を含む